

## レビ記15章「人に移る汚れ」

### 1A 男の漏出 1-18

#### 1B 性病 1-15

#### 2B 性行為 16-18

### 2A 女の漏出 19-33

#### 1B 月経 19-24

#### 2B 不正出血 25-33

レビ記 15 章からです。私たちは、10 章で主が語られた、清めと汚れの区別について学んでいます。初めは、食べてもよい清い動物か、それとも食べてはならない汚れた動物かの区別を見ました。次に女の出産における出血を見ました。不浄の期間とされました。そして、ツアラアの汚れです。そして 15 章でその区別の最後になります。男女のそれぞれの性器から出てくる、漏出です。

### 1A 漏出する体液 15

#### 1B 男の漏出 1-18

#### 1C 性病 1-15

1 主はモーセとアロンにこう告げられた。2「イスラエルの子らに告げよ。だれでも、隠しどころから漏出があったなら、その漏出物は汚れている。3 その漏出物による汚れは次のとおりである。その隠しどころが漏出物を漏らしても、あるいは、その隠しどころが漏出物をとどめていても、そのことはその人の汚れである。

15 章に出てくるのは、性器からの漏出物です。1 節から 18 節までは男性の性器からの漏出物、19 節以降は女性からの漏出物ですが、それは月経や不正出血のことです。男性からの漏出物については、16 節から 18 節で射精が出てきます。では、1 節から 15 節までのこの漏出物は何ですか？と言いますと、原語の辞典では、ほとんどが「性病」特に「淋病」と書いてありました。12 章以降、祭司がまるで、お医者さんになっているかのような教えになっています。産科のお医者さん、皮膚科のお医者さん、そしてここは、性病科、泌尿器科、婦人科のお医者さんというところでしょうか。性病科のサイトには、淋病の症状についてこう説明しています。

*男性での典型的な症状は感染の機会があつてから 2~7 日くらいの後に、灼熱感を伴う排尿痛、尿道口よりだらだらとした黄緑色の排膿をもって発症します。放置した場合、何日かすると自然に排尿痛や排膿が治まる場合もありますが、淋病が治癒したわけではなく尿道内にいつまでも潜伏しているので相手にも感染させることとなります。*

主がここで、「汚れている」と言われているのは、この「だらだらとした黄緑色の排膿」というのが

ここで言っている漏出物です。そして漏らしている時だけでなく、「とどめていても」汚れているというのは、尿道内に潜伏していることを意味しています。そして男性であることも大事です。ここで「その者」となっているのは「イシュ」つまり「男」です。女性の場合は症状が表に出てこないそうです。

<sup>4</sup> 漏出を病む者が寝た床は全体が汚れる。またその人が座った物もすべて汚れる。<sup>5</sup> その床に触れた者はだれでも自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>6</sup> 漏出を病む者が座った物の上に座った者は、自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>7</sup> 漏出を病む者の隠しどころに触れた者も、自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>8</sup> 漏出を病む者が、きよい人に唾をかけたなら、唾をかけられた人は自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>9</sup> 漏出を病む者が乗った鞍は全体が汚れる。<sup>10</sup> また、何であれ、その人の下にあった物に触れた人はだれでも夕方まで汚れる。また、それを運んだ者も自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>11</sup> また、漏出を病む者が水で手を洗わずに触れた人はみな、自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>12</sup> 漏出を病む者が触れた土の器は砕く。木の器はどれも水で洗う。

この漏出の汚れが、極めて強い伝染力で他の人に移します。確かに、淋病は感染力が強いです。これらの教えを守れば、確かに性病が移ることは避けられるでしょう。けれども、もう一度確かめませんが、レビ記の「汚れ」は衛生や医学の見地から汚(よご)れていることを話しているのではなく、霊的現実を目で見える形で表しているものとして取り扱っています。ですから、汚(よご)れではなく、汚(けが)れなのです。

12 章からここに至るまで、私たちは詳しく「罪」について学ぶことができます。母親の出産に伴う悪露という出血は、原罪を表していました。つまり、アダムが罪を犯したことによって、その子孫が罪を受け継いでいる状態です。母の胎にいたときから、私たちは罪ある者だったのです。罪を犯すから罪人になったのではなく、生まれながらにして罪人だったから罪を犯します。

そして「ツアラアト」については、「内にある罪の性質」を表していました。私たちの内にある罪は、長いこと表に現れず潜伏します。そして表に出たときも、他のかさぶたや膿、火傷の跡のように、他の軽い症状と変わりません。私たちの罪もごく些細なことのようには思われます。ところが、それが広がります。広がりを見せた時には、もう遅いです。同じように、罪は私たちの良心を麻痺し、自分が知らないうちに私たちを破壊しているのです。

そして、ツアラアトの恐ろしさは、「孤独」になることでした。宿営の外に住まなければならない、人が近づいても「汚れている」と叫ばなければいけませんでした。同じように、罪というのは私たちを孤独にします。神との交わりから私たちを引き離します。そして他の人との関係も壊し、私たちを引き離します。

そして、ここの漏出物です。ここは「外に出てくる罪」と読んだらよいでしょう。汚れが他の人々に移っていく、ということです。もう一度、イエス様が何をもって私たちを汚すか、それを教えられた言葉を読みます。マルコ7章21-23節です。「内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」内側から出てくる汚れですが、それは本人を汚すだけでなく、外にいる人にも極めて強い感染力をもって汚していきます。

汚れについて、興味深いやり取りが、ハガイ書にあります。預言者ハガイが、祭司に尋ねて、祭司が答えています。「2:12-13 人が聖なる肉を自分の衣の裾に入れて運び、その裾がパンや煮物、ぶどう酒や油、またはどんな食物にでも触れた場合、それは聖なるものとなるか。」祭司たちは「否」と答えた。そこでハガイは言った。「もし死体によって汚れた人が、これらのどれかに触れたら、それは汚れるか。」祭司たちは「汚れる」と答えた。「聖なる肉が他のものに触れても、その聖さは移りません。けれども、汚れについては他の人に移ります。汚れは人に移すのですが、聖さについては、いけにえを献げるなど、自分自身が主に近づき、主の恵みを受けることによって、はじめて聖められます。私たちは、聖めについては人任せにできないのです。しかし、私たちが主に繋がらなければ、容易に他の人から汚れを受け取ってしまうということです。

例えば「陰口」です。箴言は陰口の悪をたくさん描いていますが、26章20-22節を読みます。「22 薪がなければ火が消えるように、陰口をたたく者がいなければ争いはやむ。21 炭火に炭を、火に薪をくべるように、口論好きな人は争いをかき立てる。22 陰口をたたく者のことばは、おいしい食べ物よう。腹の奥に下って行く。」いかがですか、私たちが陰口を聞くと、それは「おいしい食物」のように「腹の奥に下っていく」ようになります。それで、それが自分の汚れとなり、今度は自分が感染源になっていくのです。

次に「妬み」です。怒りや憤りも人を汚し、悪影響を及ぼしますが、それ以上に妬みは人々に染みとおるように汚していきます。「箴 27:4 憤りは残忍で、怒りはあふれ出る。しかし、ねたみの前には、だれが立ちはだかることができるだろうか。」ユダヤ人宗教指導者のイエス様に対する妬みは、数日前まで、「ホサナ」と叫んでメシヤとして迎え入れたユダヤ人群集を、「十字架につけろ」と叫ぶ殺人鬼に変えてしまいました。

さらに「苦み」また「憎しみ」も多くの人を汚します。本人は穏やかに話しても、心にあるものが出てきて他の人に対して毒矢のように傷めていきます。「26:24-26 憎んでいる者は、唇で身を装うが、心のうちに欺きを潜めている。声を和らげて語りかけてきても、信じるな。その心には七つの忌み嫌われるものがある。憎しみはうまくごまかし隠せても、彼の悪は集いの中で現れる。」次はヘブル書12章です。「14 すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。15 だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い

根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」聖さを保つために、互いによく監督する必要があります。

<sup>13</sup> 漏出を病む者が漏出からきよめられたときは、自分のきよめのために七日を数え、自分の衣服を洗い、自分のからだに新鮮な水を浴びる。こうしてその人はきよくなる。<sup>14</sup> 八日目に彼は自分のために山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取り、主の前、会見の天幕の入り口に行って、それらを祭司に渡す。<sup>15</sup> 祭司はそれらのうち、一羽を罪のきよめのささげ物とし、もう一羽を全焼のささげ物とする。こうして祭司はその人のために、主の前で漏出物のゆえに宥めを行う。

漏出物を患う人にも、希望がありました。出産の不浄においても、ツアラアトにおいても、必ず清められた時の儀式があったように、ここにも儀式があります。しかし、ツアラアトの時に学びましたが、それは神がご介入される時で、主ご自身が触れることによってその人が清められ、それで、この儀式に参加することになります。

七日を数え、衣服を洗い、からだに溜池の水ではなく新鮮な水を浴びます。御霊によって清められたことを表します。そして八日目には、鳩によるいけにえを、一羽は罪のきよめのためのいけにえ、そしてもう一羽は全焼のいけにえとして献げます。このように、我が身を汚し、他の人も汚してしまう罪ではありますが、主が悔い改めと、御霊の洗いによるやり直しを与えてくださっています。

### 2C 性行為 16-18

<sup>16</sup> 男が精を漏らしたときは全身に水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>17</sup> 精が付いた衣服と皮はすべて、水で洗う。それは夕方まで汚れる。<sup>18</sup> 男が女と寝て交わったなら、二人はともに水を浴びる。彼らは夕方まで汚れる。

先ほどまでは、慢性的な漏出、そして不正常な漏出を取り扱っていましたが、ここでは正常な、単発的な漏出を取り扱っています。精を漏らしたときというのは、夢精のことを話しているのでしょう。そして、男女が寝て交わるというのは、もちろん夫婦関係の性交渉のことです。聖書では、結婚外において寝床は倫理的、霊的にも汚れたものとみなしています。

興味深いのは、精を漏らしたり、性交渉をしたりした後で、全身水を浴びることです。もちろん、それが一番、きれいさっぱりできる方法ですが、再びこれは霊的な側面を反映している姿です。つまり、私たちが罪を告白すれば、すべての悪から清められる、という真理です。「Iヨハ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

ある人から、次のような質問を受けました。「私がまだ告白しきれしていない、隠れた罪については

どうすれば良いのですか。まだ意識に上っていない罪があるならば、まだ清められていないのですか。」そこで私は今、読んだヨハネ第一 1 章 9 節を読ませました。「すべての不義からきよめてください。」とあります。エゼキエル書にも、こう書いてあります。「エゼ 18:21-22 しかし、悪しき者でも、自分が犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべての掟を守り、公正と義を行うなら、その人は必ず生きる。死ぬことはない。彼が行ったすべての背きは覚えられることがなく、彼が行った正しいことのゆえに、彼は生きる。」今、立ち返っているならば、すべての罪はおぼえることはない、と主はみなしてください。

## 2B 女の漏出 19-33

### 1C 月経 19-24

<sup>19</sup> 女に漏出があり、漏出物がからだからの血であるなら、彼女は七日間、月のさわりの状態になる。だれでも彼女に触れる者は夕方まで汚れる。<sup>20</sup> 彼女の月のさわりの時に使った寝床は全体が汚れる。また、彼女が座った物もすべて汚れる。<sup>21</sup> 彼女の床に触れた者はだれでも自分の衣服を洗い、水を浴びなければならない。その人は夕方まで汚れる。<sup>22</sup> また、何であれ、彼女が座った物に触れた人はだれでも自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。<sup>23</sup> 彼女の床であれ座った物であれ、それに触れたなら、その人は夕方まで汚れる。<sup>24</sup> また、もしも男が彼女と寝るようなことがあるなら、彼女の月のさわりが移って、その人は七日間汚れる。彼が寝る床も全体が汚れる。

女性の月経のことです。出血の期間は平均して三日から七日ですが、主は、「七日間」をその期間をさせています。実際に出血している期間ということ以上に、儀式的に、完全数である「七」をもって汚れているとされています。そして、男の漏出と同じように、生理の血による汚れも伝染します。けれども、実際の菌の感染ではないのですから、あくまでも表象(イメージ)的な意味で神は述べておられます。

このようなことを見ると、「ずいぶん女性を差別しているな」と感じる方はおられるでしょうか？男性の場合は性病の漏出なのに、女性は健康な体の生理現象なのに、なぜ女性は毎月汚れているとされるのか？と問われるかもしれません。けれども、よく考えてみてください、その間、彼女は激しい仕事をすることができません。日本でも、労働基準法に生理休暇というものが定められています。女性の体には非常に優しい掟なのです。そして、夫がその期間に妻と寝るとするのは、妻に対して不快感を与えます。それも、自分自身が汚れるということで避ける動機付けになります。けれども次の場合は、非常に辛いです。

### 2C 不正出血 25-33

<sup>25</sup> 女に、月のさわりの期間ではないのに、長い日数にわたって血の漏出があるか、あるいは月のさわりの期間が過ぎても漏出があるなら、その汚れた漏出がある間中、彼女は月のさわりの期間



と同じように汚れる。<sup>26</sup> その漏出の間は、彼女の寝た床はすべて、月のさわりの時の床と同じようになる。彼女が座った物はすべて、月のさわりの間の汚れのように汚れる。<sup>27</sup> だれでも、これらの物に触れた人は汚れる。その人は衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。

つまり「不正出血」です。生理期間を越えて、あるいは生理でもないのに出血する場合があります。子宮がんや子宮筋腫など、いろいろな原因があります。けれども、彼女にも他の汚れた人と同じように希望があります。

<sup>28</sup> 女が漏出からきよくなったら七日を数え、その後、彼女はきよくなる。<sup>29</sup> 八日目に彼女は自分のために山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取り、それらを会見の天幕の入り口の祭司のところに持って行く。<sup>30</sup> 祭司は一羽を罪のきよめのささげ物とし、もう一羽を全焼のささげ物とする。祭司は彼女のために、主の前で汚れた漏出のゆえに宥めを行う。<sup>31</sup> あなたがたは、イスラエルの子らをその汚れから離れさせなさい。彼らが、彼らのただ中にあるわたしの幕屋を汚し、自分たちの汚れで死ぬことのないようにするためである。」

男性の漏出が清められた時と同じ儀式を受けます。

新約聖書で不正出血を患っている女が出てきますね。「長血を患う女」の話です。12 年間このような状態でした。けれども、ツアラアトに冒された人と同じように、悲惨な状況から主イエスによって直していただいた福音が書いてあります。マルコ 5 章 26 節を読みますと、「彼女は多くの医者からひどい目にあわされて、持っている物をすべて使い果たしたが、何のかいもなく、むしろもっと悪くなっていた。」とあります。いかがですか、重い病気を患っている方は似たような経験をされているのではないのでしょうか？

けれども、彼女は、会堂司ヤイロの家に行こうとしているイエス様のことを耳にしました。イエス様に群集が押し迫っているのです、その群集を掻き分けて近づいていったのです。わかりますか、これで何人の人が汚れてしまったことでしょうか！彼女はイエス様の着物に触って、「5:29 すぐに血の源が乾いて、病気が癒やされたことをからだに感じた。」とあります。

それでイエス様は言いました。「5:30 だれがわたしの衣にさわったのですか。」そして、「5:33 恐れおののきながら」とあります。そりゃあ、そうです。彼女は衆人環視の中で、自分が大勢の人を汚してしまったことを明かさなければいけなかったのです。けれども、彼女は「5:33 イエスの前にひれ伏し、真実をすべて話した。」とあります。彼女が衣に触れさえすれば清められる、と思ったのも信仰ですが、主の前にひれ伏して、真実をすべて話したのも信仰の表れです。

私たちも同じように病があるかもしれません。身体の病気のみならず、罪の病もあります。長期

に渡っているかもしれません。幼い時から始まっているかもしれません。そして、それを人に話すものならば、他の人たちを失望させ、苦しめ、悩ますかもしれません。けれども、主イエスには清める力があります。この方に触れてみてください、その一歩を踏み出してみてください。主は治してくださいます。

<sup>32</sup> 以上が、漏出のある者、精を漏らして汚れた者、<sup>33</sup> 月のさわりで不浄な女、男か女で漏出のある者、また汚れている女と寝た男についてのおしえである。

15 章のまとめです。漏出、月のさわり、いろいろな例がありましたが、要は、31 節、「彼らが、彼らのただ中にあるわたしの幕屋を汚し、自分たちの汚れで死ぬことのないようにするためである。」ということであります。聖なる神がおられる中で、汚れがあってはならない。さもなければ、死んでしまうということです。私たちがどれだけ、キリストの流された血によって、御霊によって清められる必要があるかを知ります。そして、主に罪を言い表して、清めていただき、罪を捨て去る必要があります。そのことによって、聖なる神が私たちのただ中に住んでくださることができるのです。